

は、O-157 : H 7 となっています。

何故、O-157が、そんなに恐いかと言うと少量でペロドキシン（毒）を生成する為で有る。しかも、普通の菌の場合には100万個位にて毒を生成するのに対して、このH 7は100個位でも、もっと少数個でもペロドキシンを成生する為、この毒が合併症を引き起こし、尿毒症、中枢神経症、能障害、^{チンカン}癲癇、死亡と現象が出て来ています。又このペロドキシンが血小板、赤血球を破壊する為で有る。

次にその対策方法ですが、O-157を反対から数値を読んで覚えたら簡単です。75℃以上の熱を1分間加える事で菌は0になります。死滅致します。しかし熱を加えられないものにはどうしたら良いのか、これ等には、菌の殺菌作用にスマール酸と言う有機酸の一種で、もともと米の表面に、又キノコにも有りますが、そのスマール酸が非常に良く効くと言われ、グラムエンセイ菌と言って、ちょうどO-157を含む大腸菌、サルモネラ、腸過ヴィブリオと言う様な、日本の食中毒の7〜8割を標る食中毒の細菌を5000万個有る食中毒O-157菌を使って試験しました。5000万個のO-157が1分間洗浄しただけで0になると言う極めて驚異的な効果が出まして、しかも天然物で有ると言う事から、ある部分では大変注目されております。現在、市販されております。もしO-157で危いなーと思う様でしたら、又O-157を視てみたいと想われる方が有りましたら、その時は是非御用名下されば、と思います。その他には、やはり集団発生はしませんけれども、ポッポッと家庭内から、発生している様ですが、それはやはり、口、食物、便、と言う様な感染によってではないかと思われます。

現在の菌の測定法にも問題が有るのではないかな？現在の公定法と言われる培養して菌のコロニーと言う菌の数を数えてやる方法では菌は出てこない、確認出来ない。しかし従来の公定法では菌は、0なんですが実際、違う方法の蛍光法でやってみると、どんどん菌が生きているのが判明出来ます。実際は繁殖はしないが、菌は生きているのが確認出来る。故に現在行われている通り一辺の測定法では、なかなか菌の改明は出来にくい部分があり、検当して行かなければならないと思います。何はともあれ、食物は採らずにいられない、どこかで菌を断切らねばなりません。その為には手を洗って下さい。食中毒防止には70点はやれます。その手を洗うと言う事が、なかなか難しいのが手洗です。手を洗うと言う事は、消毒液を付けて、洗って載きたい。消毒液を付けなくて、水洗した場合には余計汚くなります。それでは菌はどれくらいいるのかと言うと、便の中1g当り数千億個の細菌がいますので、トイレの後には、必ず消毒液で手を洗って下さい。どこかで細菌系路を断たなくてはなりません。O-157は最初は畜肉とか、カイワレとか言われていますが、要は、O-157と言うのは赤痢の遺伝子が^{チンカン}大腸菌にのり移った遺伝子組替え（エマージングディギス）、新しい疾患で有る細菌の進化論で有る。O-157の現象だけで、恐れるのではなく、もっと、何故遺伝子が組替って行ったのか、新しい品種が出来て来たのか、進化して来たのか、と言う様な社会背景をもっと我々は考えて行かなければならないと思います。順天堂大の平松先生は、ある種の抗生

物質が、遺伝子組替を容認するし、ベルトクス酸性を高めると言う様な事を報告されております。

更に抗生物質、合成ホルモン等々は、厚政省も農政省もやっていますが、モニタリング調査で、年々かなりの量で増えて来ております。使用量も増加している事も時実でございます。と言う事は、「より安く、より多く、より短期間」と言う様な経済効率だけを考えた製造姿勢、あわせて、これを要求する消費者の考え方、この辺が大きく、この様な進化論、新しい細菌が次から次へと出てくる社会背景になっているのではないだろうかと思う次第です。たとえば花粉症もそうですネ。人間から見たら非常に迷惑です。

たしかに終戦直後の森林行政の問題も有ったかもしれませんが最近の発表では、なぜ花粉が人間をいじめるのか花粉と言うのは自分達が生きていけなくなった場合において花粉を飛ばして花粉はひじょうに強いので子孫を残そうとしているのです。何故杉の木が生きて行けなくて、花粉をとばすのか。それは環境の炭酸ガスが大きく影響していると言う発表が最近非常に多くなって来ております。

と言う事は、花粉症にしても花粉にしてもO-157にしても我々人間の生活「人間よ、お前達だけが生きものじゃないんだよ、とチョット増長しすぎているのではないのか」と言う事への人間に対して警鐘しているのではないかと、その辺一我々はもう一度考えて見る必要が有る。やはり我々の生活を豊だからこそもう1回原点に帰って考えて見る必要が有ると思う。くらしと生活は違うはずです。生活と言うのはルールが有るはずで。ではルールとは何んぞやとなると自然の循環に適した。自然の循環に適応する為の生活体系からの恵と時代背景を考えたくふうこれがルールではないだろうかと思ひます。

それを自然の循環を考えないで歴史の知恵を考えないでただたんに時代背景から要求される物だけを求めていったならば、私はそう言う研究は罪悪になるのではないだろうかと思ひます。

食べ物と言うのは、良い人が食べる人の気持をもって作るのが食物となった。だからこそ食べる人は作った人の気持を考えて食べる事が出来る。つまり食べる人と作る人のお互の顔が見える事で有る。これが食物ではないだろうかと思ひます。これから種々な食品が意図的に遺伝子組替した大豆の様なものが次から次へと出て来ます。それが良いとか悪いとかは言わないがただ、前提に食べものとは、生活とはなんぞやと言うものを考えながら、そう言うものとどう対応して行くのか考えなくてはならない。

第 3 回 理 事 会

開催場所 平成9年9月2日(火) 11:30~12:30

開催場所 三条ロイヤルホテル2F

出席者 米山 落合 佐藤(義) 吉川 石川 堀川 長谷川(博) 大野 本間(建)

今井 小林 山本(充) 佐藤(啓) 梨本

出席者14/14名

協議事項 1. IM参加者名の報告 28名の参加確認